

土木分野における アウトリーチの先駆者たち

記事
4-1

「土木技術者の アウトリーチ」に寄せて

藤井 聡

正会員

京都大学大学院教授

同大学レジリエンス研究ユニット長

筆者は大学教員であつて、その業務内容は、大別すれば、教育、研究、学内業務、社会貢献だ。そして学会にはさまざまなものに所属しているが、その中で一番時間を費やしているのはやはり土木学会だ（本稿執筆もそのうちの一つである）。そして、社会貢献の一環として行うさまざまな執筆活動についてもやはり、土木と深くかわるものが多い。たとえば、ここ最近『救国のレジリエンス』、『列島強靱化論』、『公共事業が日本を救う』などの一般書を出版したが、これらはいずれも土木に深くかわるものだ。

そしてこれらの出版を契機として、国会の公聴会や新聞、雑誌、テレビやラジオ等で、さまざまな公述や発言を行う機会を、この1年ほど急にいただくようになった。テーマ

「基盤を整える」という行為は単なる手段だ。

それはさながら、兵士の本質は国を守ることなのであつて、武器を扱うことそれ事態にはないということと同じだ。武器を使って戦うが国を守る気などさらさらないという兵士は、傭兵ではあつても真の兵士ではない。だからこそ民を救う精神なき土木技術者は真つ当な土木技術者では断じてない。それを忘れた者は、技術を使って商売をする輩にしか過ぎない。

果たして今の日本に真つ当な土木技術者がどれだけ存在するのか——無論、それは筆者にはわからない。

ただし、筆者はこの点について次のように感じている。それは、筆者が何かのご縁でたまたま従事するようになった執筆・言論活動を、土木の延長にある活動としてごく自然なものとしておとらえただけの方は、真つ当な土木技術者の方ではないか、という感触である。

無論、それは筆者の単なる主観でしかないし、筆者の動機を自身で正確に理解することなど不可能だ。



土木技術者の羅針盤 1

しかし、万一築土構木の精神を共有しているのなら、そんな精神に基づいたテレビや雑誌などのアウトリーチの長い仕事を目にしたとしても、その仕事の根っこにある精神をいとも容易く見抜き、アウトリーチの長さをことさら話題にすることなく、自然に事態を了解することだろう。

ところがそんな精神を共有していない方々は、そのアウトリーチの長さを好奇の眼で見つめるとともに、そんな仕事が何か別の邪な動機に基づくものだとして想像できないだろう。

——つまり、アウトリーチの長さなどというものはご縁の有無によって決まるものであつて、その長さを気にすることそれ自体が土木技術者の姿勢としていかなものなのか、という側面がありやしないかと筆者は思うのである。

そもそも、はじめに近代土木技術を学んだ井上勝は、自らのアウトリーチの長さなど何も気にせず、ただ日本の富国を目指していたに違いない。アウトリーチの長さに気を取られる前に、築土構木の精神を研ぎ澄ましつつ、その場その

場のご縁に真剣に向き合うことこそが求められているのではなからうか。アウトリーチの長さも、ひい

ては自分自身が何者であるかなどということも、後で人が決めることにしか過ぎないのである。